

を記憶している。

コンパクト集合はついに分からず終いだったが、エントロピーについてはこの教科書のお蔭で何とかなった。「書物は始めからじっくりと、何回か読むと、いずれ理解できるようになる」ということを教えてくれたのもこの教科書。Peter W. Atkinsの「エントロピーと秩序—熱力学第二法則への招待」(米沢富美子・森弘之共訳、日経サイエンス社)と併せて読むと、エントロピーというものがより身近に感じられるかも知れない。それは、カオスや複雑系といった新たな科学のパラダイムへの序章である。

手元に置く本として

仲西 正

1. 松田徳一郎編集代表「リーダーズ英和辞典(第2版)」研究社, 1999.

学生時代から、英語で書かれた論文や教科書を読むために様々な英和辞典を使ってみたが、最近はこの辞典に落ち着いている。この辞典の特徴は、科学技術用語、新しい言葉、そして固有名詞に詳しいことであると思う。最近20年ほど、日本の学習英和辞典は確かに進歩し、文法的な記述や例文に不足を感じることはなくなった。しかし、論文などの専門語を学習辞典で調べると当然ながら載っていないことが多く、他の専門分野の辞典で調べる必要が出てくる。数冊の辞書を使い分けるのは、なかなか大変であったのだが、リーダーズ英和辞典を使い始めてから、これ一冊で間に合うことがほとんどである。また、この英和辞典は訳語のみを示すのではなく多くの語について簡潔な内容説明もついているので助かる。例えば、isotactic を引くと「主鎖に対して側鎖が同一方向にのみ配位した、…」とある。値段が多少高いが、どなたにも薦められるよい辞典である。

2. 千原秀昭・徂徠道夫編「物理化学実験法(第4版)」東京化学同人, 2000.

恒温槽の作り方や簡単なガラス細工などに始まり、温度測定、分光学的測定、熱分析、真空実験などな

ど、物理化学実験は非常に多岐にわたる内容を含んでいるのだが、その基礎技術は、有機化学などと比べると、本にまとめられているものは少ないように思われる。紹介した本は、化学系学生のための物理化学実験のテキストである。初版は1968年だが、改訂が行われ、内容は現代的になっている。この本の優れた点は、実験を行うに当たっての操作から解析までをきわめて詳細に記述していることである。これらの記述は自分で実験をデザインしたりする場合に大変に参考になる。学生実験として37テーマを取り上げているが、研究者となっても役に立つ内容が多い。物理化学また定量的な実験を行う学生には是非に薦めたい本である。

生化学を楽しく学ぶために

藤原 葉子

大学で初めて生化学を学んだときに購入した教科書は、コーンスタンプの生化学という私が買った教科書の中でもっとも値段が高く、重量もあり、持ってくるだけで大学生になったような気がするものだった。当時教わった生化学は、有機化合物としての色合いが強く、分子模型を組み立てて構造をみたり、酵素反応も有機化学反応のひとつとして詳細に説明されたりしたので、もともと有機化学の苦手な私には取り立てて魅力のある分野というわけではなかった。卒業後思いがけず生化学とつきあうことになったが、この分野の日々の発展は目を見張るものがある。教科書も5年もたてば内容が古くなってしまっているので、次々に改訂されていく。そのような毎日の新しい発見に、わくわくしながら現在進行形でついていけるのが、今の生化学の楽しさなのではないかと思う。最近の教科書は図も美しく非常にわかりやすいので、面白く読んでいくことができると思う。

1. シンプル生化学 南江堂

昨年生化学の教科書を執筆するときに、これだけのページ数にもかかわらず、コンパクトにわかりやすく、必要なことがかなり高度なことまで全部書か